

入院中の高校生への教育支援

—大学生による学習支援ボランティアの意義と効果—

増 戸 南 埼玉大学大学院教育学研究科
関 由起子 埼玉大学教育学部学校保健学講座

キーワード：病弱教育、学習支援、入院中の高校生、大学生ボランティア

1. はじめに

小児がんなどの入院治療が必要となる疾患を持つ子どもたちの、入院中の学校教育は今まで十分に提供されておらず、入院中は学習空白となるケースが多数存在していた（文部科学省, 2012）。しかし、平成25年に小児がん拠点病院が選定され、病院内において病弱児への学校教育についても制度として支援体制が整備されはじめ（橋本・丹藤, 2017）、義務教育である小中学生に関しては現在学習指導が行われるようになりつつある。一方で、入院中の高校生に対しては、2015年の調査では36都道府県、6指定都市でなんらかの教育の場が提供されているものの、これらの対象は入院中のすべての高校生に対する提供ではない場合が多い（森山ら, 2016; 新平ら, 2017）。小児がん拠点病院の2016年度の調査では、15施設中、高校1-3年生の入院生を対象とした学校が設置されていたのは1校のみであった（滝川, 2016）。

高校生が入院中に学習を継続することが困難である理由に、高校教育は義務教育でないことがある。また、高等学校には受験による選抜の結果入学しているため、入院中に他校で行われる授業が単位互換可能かという問題もある（新平ら, 2017）。院内に高等部がある場合でも、一度転籍してしまうと前籍校に復学出来る保証がないこともある。さらに、高等専門学校では、専門教科を担当出来る教員が入院中の生徒のために確保できない事も多い。その結果、留年や退学、あるいは通信制などの他の高等学校への転校を余儀なくされる場合も少なくない（文部科学省, 2012）。

以上のような状況の中、小児がん拠点病院の1つである埼玉県立小児医療センターに併設する埼玉県立けやき特別支援学校（小学校、中学校のみ）が、入院中の高校生に対する学習支援を始めた。これは在籍高校の教材を使った生徒の自主学習への支援が基本であり、埼玉県立けやき特別支援学校（以下特別支援学校とする）の学習支援コーディネーター（教員）が、入院中の高校生が在籍する学校から受け取った連絡やプリント等を高校生に届け、その学習状況をベッドサイドで確認する方法である。さらに、埼玉大学教育学部の大学生ボランティアによる学習支援も導入し、特別支援学校の教員と協働しながら大学生がベッドサイドで高校生の学習を支援する（関, 2018）。その結果、入院中の高校生への学習面はもちろんのこと、大学生ボランティアの存在がこころの安定に大きく役立っているという声が対象の高校生や保護者から聞かれている（涌井・関, 2017）。

近年AYA世代への支援がクローズアップされているが、高校生という青年中期の発達課題の視点からのアプローチは少ない。文部科学省（平成21年）は青年中期（高等学校）の発達課題を、「親

の保護のもとから、社会へ参画し貢献する、自立した大人となるための最終的な移行時期である。思春期の混乱から脱しつつ、大人の社会を展望するようになり、大人の社会でどのように生きるのかという課題に対して、真剣に模索する時期である」としている（文部科学省，2009a）。これらの発達課題に加え、重篤な疾患の治療という困難を高校生たちが乗り越えるために、医療従事者でも学校教員でもない大学生という存在がどのように機能したのであるだろうか。そのため、本研究では学習支援ボランティアを行った大学生、学習支援を統括している特別支援学校の教員にインタビュー調査を行い、大学生による入院中の高校生への学習支援の特徴および支援のあり方を検討することを目的とする。

2. 方法

2-1. 学習支援ボランティアを終えた大学生、大学院生、特別支援学校で高校生支援を担当した教員へのインタビュー調査

1) 調査対象

入院中の高校生に対して学習支援ボランティアを行った埼玉大学教育学部養護教諭養成課程に所属する大学生5名と同大学教育学研究科の大学院生1名、および特別支援学校の学習支援コーディネーター担当の教員2名と養護教諭1名を対象とした。

2) 大学生による学習支援ボランティアの状況

特別支援学校の高校生学習支援の詳細については、涌井・関（2017）、関（2018）を参照のこと。学習支援ボランティアは養護教諭課程の3年生計20数名が担当し、一人につき8日程度、交代しながら1年間継続的に行った。この学生たちは医学や看護の基礎的知識を大学の授業で学んでおり、さらに特別支援学校の学習支援コーディネーターから、受け持つ患者の病状を含めたオリエンテーションを事前に受けている。また、埼玉県立小児医療センターの規程に則り、感染症対策として水痘、麻疹、風疹、流行性耳下腺炎、結核の抗体価とインフルエンザワクチンを含む予防接種記録、個人情報保護に関する誓約書を事前に提出している。

3) データの収集方法

ボランティアを終えた大学生・大学院生6名が二人一組となり対象学生に半構造化面接を行った。特別支援学校の教員に対しては、著者らが半構造化面接を行った。

4) データの収集内容

大学生・大学院生に対しては「学習支援ではどのような活動をしたか」、「高校生の勉強に取り組む様子はどうだったか」、「高校生とどんな話をしたか」、「学習支援参加前に準備しておけばよかったと思うことはなにか」、「教員免許をもつ人が学習支援を行うほうがよいと感じたか」等を、教員には「大学生が行ってきた学習支援はどのように感じたか」、「入院中の高校生に何か変化はあったか」、「大学生に求めたいことは何か」、「今後の見通し」等を尋ねた。

2-2. 学習支援ボランティアを終えた大学生、卒業生へのWebアンケート調査

1) 調査対象

入院中の高校生への学習支援ボランティアを2015年1月～2017年10月に終えた埼玉大学教育学部養護教諭養成課程に所属する大学生44名を対象とした。

2) データの収集方法

Web アンケート作成ツール Google フォームを使用し無記名の調査を行った。Google フォームは Google ドライブ上で使用する問い合わせやアンケートなどのフォームを簡単に作成することができる無料のツールであり、回答者がパソコンやスマートフォンを用いてインターネット上で回答することができる。アンケート調査への協力は、ソーシャルネットワークサービス LINE を用いて依頼し、併せて Web 調査の URL を添付した。調査は 2017 年 11 月から 12 月にかけて実施し、23 名から回答があった。

3) 質問内容

大学生・大学院生への面接調査と同様の項目「学習支援ではどのような活動をしたか」、「高校生の勉強に取り組む様子はどうだったか」、「高校生とどんな話をしたか」、「学習支援参加前に準備しておけばよかったと思うことはなにか」、「教員免許をもつ人が学習支援を行うほうがよいと感じたか」を自由記述で尋ねた。

2-3. 分析方法

対象者が語った内容の逐語録と Web 調査での記述内容を分析に用いた。分析には、木下(2007)の修正版グランデッド・セオリー・アプローチ (以下 M-GTA) を用いた。本研究の分析手続きは以下の通りである。

- (1) 一事例に着目し、分析テーマに関連する箇所 (具体例) を文脈がわかる分量でトランスクリプトから抜き出し、概念名を与えた。
- (2) 他の事例から同様の方法で類似の具体例を抜き出した。
- (3) 解釈の恣意性を防ぐため、類似例、対極例があることを確認しつつ、概念名とその定義、具体例を分析ワークシートにまとめた。分析ワークシートとは、概念名、定義、具体例、対極例や分析の視点を書き留める理論的メモからなるもので、一概念につき一ワークシートの形式で作成した。
- (4) 分析ワークシートに照らしつつ、概念と概念の関わりを、理論的メモを参考にしながら、検討を行いグループ化し、カテゴリーを生成した。
- (5) カテゴリーおよび概念の関わりやプロセスを図に表した。
- (6) 作成した図を研究者間および同様の経験をもつ学生や教員に確認してもらい、大学生が入院中の高校生へ学習支援を行う実態と効用の妥当性について検討した。また、学会等でも発表し、カテゴリーや図の確からしさを参加者と検討した。

2-4. 倫理的配慮

研究への参加は協力者の自由意思とした。特別支援学校の学校長および面接者には研究説明書を渡し、口頭と文書で研究の目的や方法、個人情報の保護方法、研究不参加の方法、調査結果の公表方法等について説明を行い、文書での同意を得た。Web 調査では、調査開始前に上記の情報を提示し、同意を得た場合のみ質問項目が現れるようにした。

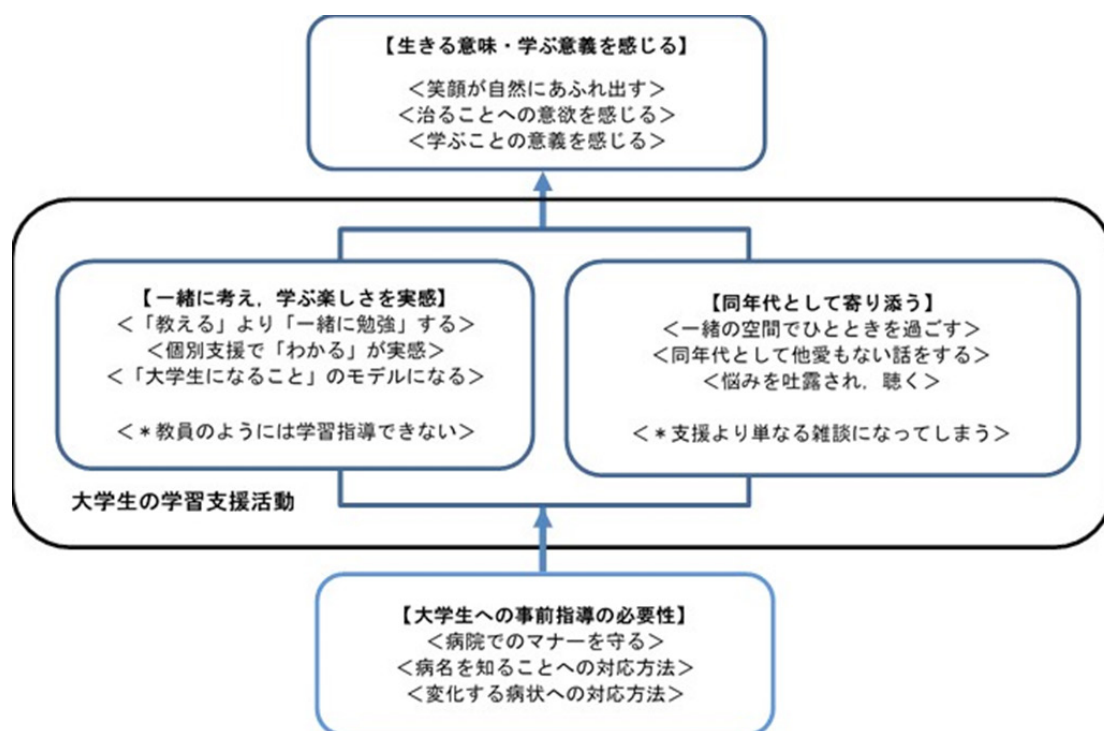
3. 結果

分析の結果、生成された概念およびカテゴリーの関係を図に示した。なお、概念名は〈 〉、概

念のまとめりであるカテゴリー名は【 】を用いて表した。

3-1. ストーリーライン

学習支援ボランティアを始めるにあたり、〈病院でのマナーを守る〉、〈病名を知ることへの対応方法〉、〈変化する病状への対応方法〉という【大学生への事前指導の必要性】があった。その指導後に行われた大学生による学習支援には〈「教える」より「一緒に勉強」する〉、〈個別支援で「わかる」が実感〉、〈「大学生になること」のモデルになる〉というスタイルがあり、【一緒に考え、学ぶ楽しさを実感】させるという特徴が見出された。また大学生の高校生への接し方として、〈一緒にの空間でひとときを過ごす〉、〈同年代として他愛もない話をする〉、〈悩みを吐露され、聴く〉という、【同年代として寄り添う】特徴があった。しかし大学生からは、【一緒に考え、学ぶ楽しさを実感】することの問題点として〈教員のように学習指導出来ない〉点や、【同年代として寄り添う】時に〈支援より単なる雑談になってしまう〉ことをあげていた。しかし、特別支援学校の教員はそれらを大学生ならではの利点ととらえていた。このような大学生による学習支援の結果、高校生には〈笑顔が自然にあふれ出す〉、〈治ることへの意欲を感じる〉、〈学ぶことの意義を感じる〉という【生きる意味・学ぶ意義を感じる】反応が見られた。



図：大学生による入院中の高校生への学習支援の効果
 < >はインタビュー等の記録から導き出された概念、【 】は概念のまとめりであるカテゴリーである。また、*印がついた概念は、大学生は欠点と捉えていたが教員は逆に大学生ならではの利点と捉えていたことを示す。

3-2. 生成された概念・カテゴリーの詳細

(1) 【大学生への事前指導の必要性】

本大学生は教育学部所属のため、病院での活動はこのボランティアが初めてであり、入念な事

前指導が必須であると特別支援学校の教員は感じていた。その具体的な指導内容は以下の3点である。

〈病院でのマナーを守る〉

大学生は事前に大学内および特別支援学校内でボランティア活動に関するオリエンテーションを受けている。それでも特別支援学校の教員が懸念していた事項に個人情報の保護と服装規定があった。しかし、これらの不安はオリエンテーションの成果により払拭されていた。

- ・最初はやっぱり、個人情報が出れるんじゃないかという不安はあったんです。だから最初にそこは厳しく言うておかないといけないなって。(教員Aさん)
- ・年頃の男の子がなんだろうね、ちょっと勘違いしないもの(服装)で来て欲しいっていうのがあった。(教員Aさん)
- ・学生さんの態度がすごくいいので、謙虚で、丁寧で、その服装とかもしっかり大学で教育されてきているので、困ったことはなかったですね。(教員Bさん)

〈病名を知ることへの対応方法〉

長期の入院を必要とする疾患は難治であることが多い。大学生に高校生の病名や病状を伝えただけでボランティア活動を依頼していたため、病気に関する話題が出てきた時どうすればいいのか大学生は不安に感じていた。特別支援学校の教員は病気に深く入り込んだ関わりはなるべく避ける対応を望み、深刻な状況にある高校生の場合には、大学生のボランティアによる支援は行わせないという判断をしていた。

- ・(病気については)聞きづらいし、何もこっちから何か、言えないような感じっていうか。…ただこう話に行く感じとは違いますよね。(Fさん)
- ・私からあんまりそういうの(病気)について突っ込んだりしない方がいいかなと思って触れなかったけど。(Dさん)
- ・普通の教育の視点で支援していただいて、何か子どもが打ち明けたら、そこはまあ聞いていただくのは全然いいと思うんですけど、本当にその内容がちょっと病気に関することだったりちょっと重い問題だったらすぐこう支援の先生に報告をしたりして、抱え込まないでもらった方が、うまくいくのかなと思いますね。そこだけ配慮していただければ(教員Bさん)
- ・難しい子ども、精神的にふさぎ込んでいたりする子どもも学生さんたちとは接することは難しいかなと思ってそこは行ってもらわなかったんですけども。行ってもらった方もいるんですよ。何人か。でも、見ていてやっぱり会話が成立しないし、不用意にずっと長くいるとかね、あったので、やっぱりこれは無理かなあと思って。(教員Aさん)

それでも病気の話が出てきた場合には、大学生は必死に傾聴している様子がうかがえた。

- ・私が行った日、最初に行った日が病名が判明した次の日だったので、自分が入院するまでに至った経緯の話をしてきた。「なんかここが腫れてきたからなんだろうと思って、親もそ

んな重いものだと思ってなかった」って話から、診断が出るまでの経緯と診断結果が出て、そして安心したとかいう話をしてくれて。…「ああそうなんだ」って話を聞いた。(Aさん)

〈変化する病状への対応方法〉

特別支援学校の教員は当日の朝に主治医や病棟看護師に高校生の病状を確認したうえで、高校生への学習支援ボランティア実施を決定している。しかし大学生の支援活動中に病状が変化する可能性も十分考えられる。大学生はボランティア活動の実施前に高校生への配慮事項について知らされ、かつ高校生が疲労しないような関わりを行っていた。

- ・やっぱり気分転換というか、休憩の時間もやっぱり持たなきゃいけないし、学校で決まっている時間や休憩みたいなのではなくて、様子を見ながらこう休憩をいれてあげないといけないと思う (Aさん)
- ・体調において無理をさせない、そして本人が無理をしないでいられるような環境をつくること。事前に休憩がしたくなった時のサインを決めて、お互いにそれが私も嬉しいことであると伝える。それはとても大切だと感じました。(No8さん)
- ・一番大切なのはその子の体のことだから。ある子が薬の影響でおしっこの回数が多くなるっていうことを事前に聞いていて。でも男の子だから女の人の前で何回も何回もトイレに立ったりするのを結構気にしているってことを聞いていた。病室行って席に着いた時に「トイレ全然行っていいからね、気にしないで行きな」って言ったなら「まじですか。結構気にしていたんで」って言ってくれた。その子の健康を……結構気にしていたかな。(Dさん)

(2) 【一緒に考え、学ぶ楽しさを実感】

以上のような配慮事項を踏まえたうえで、大学生は一緒に考え学ぶ楽しさを実感出来るような方法で高校生に対して学習支援を行っていた。

〈「教える」より「一緒に勉強」する〉

本学習支援ボランティアを行った大学生は養護教諭養成課程所属のため、高校生への教科指導法については専門的には学んでいない。そのためか大学生たちは高校生に「教える」のではなく「一緒に勉強する」という方法で学習支援を行っていた。大学生は一緒に問題を解くことで高校生が理解し難い個所を理解することが出来、そしてその個所をわかりやすく伝えることが出来ると感じていた。

- ・学校から数学のプリントが来てそれをやるって感じだったのだけど、そこの範囲がまだ習ってない。じゃあ一緒に教科書をみて公式は丸暗記だ！ とか言って (勉強した)。(Dさん)
- ・難しいから一緒に考えるっていう感じだった。本当に難しい問題は「(私が) こっち解いてる間に、そっち (の問題) 解いてて」って言っていた。「そっちなら自力で (私が) 解けそうだから待ってて」、(高校生は)「うん、待ってる」って言ってたかな。(Cさん)
- ・わかってる人がやっちゃうと、つまずいてる理由がわからなくて困るのかなあみたいなの。大学生の方が意外と、自分たちもつまずいたりとかしたし、わかりやすいのかなって思う。(Aさん)

〈個別支援で「わかる」を実感〉

本学習支援の方法は個別支援であるため、大学生は家庭教師のように高校生一人一人の弱点を見極めることが出来ていた。そして一度勉強を「わかる」と感じる事が出来た高校生は、その後も勉強に対して意欲的になる様子が見受けられた。また、本学習支援は高校生自身による自学自習への支援であるが、一人きりでの自習ではなく学習時間に傍に寄り添うことの重要性を特別支援学校の教員たちは感じていた。

- ・「わかるって楽しいね」言われたのが記憶に残っている。私がこうやって時間かけて一つの教科とか一つの不安とかに向き合ってあげたっていうことが彼女にとっては大きかったから。時間かけて教えるようになってからイキイキしているなって伝わってきた。(Cさん)
- ・(高校生に学習支援のアンケートを取ってみると) 不安がなくなったってみんな答えているんですよ。その前の年(大学生のボランティア導入前)は不安だった、一人でやるのは難しかった(と言っていた)。(教員Aさん)

〈「大学生になること」のモデルになる〉

高校生は近い未来に進学か就職かという重大な進路を選択する必要がある。そのため大学生が自分の受験体験や大学生活の魅力を語ることは、高校生にとって将来の進路選択の参考になっていた。

- ・(大学生による学習支援ボランティアは、高校生にとって) 進路の参考になっている。だから大学入試のやり方とか、勉強方法とか参考になったと(高校生は)言っていた。(教員Aさん)
- ・高校生は特に進路に不安を抱えているお子さんが多いのでそういう意味ではね、大学生さんは(受験を)実体験しているので、(受験を経験した)身近な存在として聞きやすいのかなって印象は持っていますね。(教員Bさん)

〈*教員のように学習指導できない〉

しかし、勉強を教えてもらうことを重要視している高校生に対しては、教員のように学習指導できないことに大学生はジレンマを感じていた。

- ・他の子は学校で教員免許を持った人に教わっているのに、何で入院しているからって私たちみたいな免許持っていない人に教わらなければならないんだろうって思う。学校に行っている子と差ができちゃう。だからちゃんと免許を持った人が教えた方がいいのかなと思う。私は(物理を選択しなかったので)、ある高校生が物理やっているとき何も出来なかった。本当に無力って思った。そういうときはちゃんと免許を持った人に教えてもらった方がいいんじゃないかなって思った。(Dさん)

一方で特別支援学校の教員は、教員のような一方通行の専門的な指導を行わず、大学生が寄り添って一緒に勉強してくれることが重要であると感じていた。

- ・一番やってほしいことは勉強の方じゃなくて、年齢が近かったり、話しやすい存在であってほしい。つまり、あの子たちの心の不安をちょっとでも解消できればと思っているので。それに付随して勉強がくっついてくるって感じなんです。…「解答を導き出せるように」というのは求めていなくて、「一緒に考えてくれる」でOKなんです。(教員Aさん)
- ・わからないところを教えてもらえることももちろんありがたいですが、そこで一緒に考えてくださる、それから大学生としてのモデルになること(が良い点だと思う)。難しい年ごろの高校生にとって、(入院中は)社会と遮断されている辛さもあるし、孤独しかないし、(大学生は)ありがたい存在だなんて(思います)。(教員Cさん)

(3)【同年代として寄り添う】

本学習支援の目的として、学習支援のみならず高校生の心の安定があることを大学生は事前に知らされていた。そして大学生自身も実際の学習支援ボランティアを通して、大学生が傍に居ることの価値に気づきはじめていた。

〈一緒に空間で一緒にひとときを過ごす〉

昼間は小中学生の多くは院内の学校に通うため、高校生は一人病室に残されることがある。病室以外に行く場所もなく、そして出会う人も面会に来る親と医療従事者のみである。そのような状況の中、大学生の訪問は辛い入院生活における貴重な時間であった。

- ・少しでも一緒にいることだけでいいのかなって思いました。みんな他の人たちと会う時間はほんとに少ないと思うから。…誰かがいるだけで、落ち着いたり喋れるだけで楽しいとかあるとおもう。いるだけでそう、もう、いいんじゃないかなって。(Fさん)
- ・「決められた時間がないと自分は勉強をやらないから、人が見てくれているとやる気がする」って言っていた。「あっ、いる(だけでも)意味あるんだな」ってそのとき思った。…寝るところも、食事するところも、勉強するところも一緒でとなると、その勉強するっていう時間、空間作りのために(私がここに居ることは)役立っているのかなとは思う。(Eさん)

〈同年代にしか出来ない話をする〉

芸能人のこと、恋のことなど、大学生のアドバイスを交えての会話は高校生にとって楽しみの時間であったようである。大人には話さない内容の会話は、友人たちと隔絶された環境においては貴重なストレス発散の機会と思われた。

- ・例えば、看護師さんとか医療従事者には言えない、親にも言えない(けれど)大学生に言えることっていうのがあるのかなとは思った。…デート行くんだったらみんなやっぱりレイクタウンになるって話をした。なかなかあの辺(なにも)ないから、みんなあそこのデートになっちゃうよねっていう(話をした)。(Eさん)
- ・いろんな話をしていたんだけど、高校の部活、あと私ちょうど学祭中だったから文化祭、高校の文化祭についての話、あとは好きな芸能人と、好きな芸能人が出ている映画とかドラマとかの話だったり。…私の高校時代の話聞いてきたからひたすら話してた。(Aさん)

〈病気を抱える高校生の悩みを聴く〉

大学生が高校生の傍に寄り添い他愛のない話をした後には、大人や医療従事者、教員には語る事が無い心のうちを大学生に打ち明けることがあった。それを大学生は傾聴することによって、その傾聴の意味や大切さを実体験として理解していた。

- ・年齢も近いし、打ち明けてくれることもあった。治療のこととか病気のことなど、子どもながらによく分かっているなっていう感じがした。不安だとか、こういうことがあって大変だったっていうのも直に聞くことが出来た。(Cさん)
- ・高校生だから、ある程度こう、自分っていうのを持っているから、こっちから「何が何か不安なの」と(聞くではなく)、(向こうから)話せるような雰囲気を作るほうが、大事なのかなって思っ。(Eさん)
- ・もしなにか言われたら、授業で習ったみたいに傾聴したり、繰り返し言うこと、「そうだね、なんとかなんとかだったね」みたいな感じでやるように思っていました。(Fさん)

〈*支援より単なる雑談になってしまう〉

高校生と他愛のない会話をする事に対し、大学生は雑談をしていてよいのかと気にしている様子も見受けられた。しかし特別支援学校の教員は、高校生にとってその雑談こそが大人には出来ない価値がある行為であると評価していた。

- ・これ(雑談)はしすぎた方がいいですよ! どんどんやっていただいて。自分らは小中学生としゃべるときも勉強するときも半分くらい雑談ですから。遊びから必ず入って、勉強ちょっとやって、あと最後雑談して終わるって感じなんですよ。あそこ(病室のベッド)にいるだけでストレスなんだから。(教員Aさん)
- ・実はそれ(雑談)がすごく、彼らにとっての憩いの時間でもあったと思うんです。同年代の方たち、私たちおばさんおじさんと話すのとは違うので、その同年代の人たちと話せる時間も彼らにはすごく必要な時期だと思うんですよ。(教員Bさん)

(4)【生きる意味・学ぶ意義を感じる】

以上のような大学生による学習支援の結果、高校生の気持ちに以下のような変化が見られた。

〈笑顔が自然にあふれ出す〉

様々なストレスを抱えて入院生活を送っていた高校生に笑顔が見られるようになったと、周囲の大人がその変化に気づいていた。

- ・お母さんたちがびっくりしている、あんな笑顔は初めて見た! って。だから大学生の先生と接することによって笑顔が出る(ようだ)。(教員Aさん)
- ・学生さんが来ることによって、なんていうんですかね、高校生もすごく学習の意欲が高まっているって間接的に聞きますし、学習だけでなく笑顔が増えた、楽しみにしている(みたいです)。(教員Bさん)

〈治ることへの意欲を感じる〉

また、高校生は厳しい治療を受ける日々の中、治療への意欲がなくなるときもある。しかし大学生による支援によりストレスが軽減され、治療に向かうモチベーションも上がるがあると教員たちは感じていた。

- ・ 厳しい治療で大変な中、学習したいって思ってもできない状態のときもあるんです。それでも大学生に来ていただいて、一緒の空間で一緒の時間を過ごしてもらってということが治療へのモチベーションにもなる。治療に向かう気持ちもモチベーションも上げていただいたかなって思うんですね。(教員Cさん)
- ・ だからこう、気持ちが、なんだろうなあ、こう豊かになるっていうのかな、楽になるっていうか、前向きになれるっていうか、前向きですね。前向きになれるというのが一番ぴったりにくるかな。(教員Aさん)

〈学ぶことの意義を感じる〉

高校生にとって大学生の年代は数年先の自分の未来の姿である。入院中の大学生との出会いが大学生生活への憧れとなり、学習を続けることの大切さを感じる高校生もいた。

- ・ このままいったら入院していたら受けられるか（受験できるか）わからないんだけど、やっぱり行きたい大学（がある）。こういう大学に行きたいみたいなことを言われたかな。(Aさん)
- ・ 勉強あんまり好きじゃないみたいな感じだったけど、今頑張れば楽しいことがあるから、可愛い彼女もできるから！って励ましたら、「俺頑張ります」って言っていて。(Dさん)
- ・ 実際に受験をしたばかりじゃないですか、まだ大学生の方たちって。受験に対する思いや体験談なんかも伝えていただいて、学習方法、学習内容など、すべて参考になることをお話しいただけた。(教員Cさん)

4. 考察

本研究の結果、大学生は高校生に寄り添い一緒に学習活動を行うことにより、学習空白への対応のみならず、学ぶことへの楽しさも感じる事が出来ていた。さらに、高校生との過ごし方では、同年代であるという特徴を活かしながら、高校生の気持ちや悩みを聴き解きほぐすようや活動をしていることも明らかになった。小児病院では高校生は最年長であり、他の小中学生の前で闘病中の不安定な感情を医療従事者や家族に容易に表現出来る環境にない。その中で自分専属の大学生ボランティアという存在は、不安や感情を吐露出来る貴重な存在であったと思われる。つまり大学生ボランティアは、情緒の安定や、障害による学习上または生活上の困難を改善・克服する意欲に関することなどの「心理的な安定」(文部科学省 2009b)という重要な特別支援教育における課題の一端を担ったといえる。

大学生による関わりがより高校生の心理的安定をもたらすことが出来た理由に、大学生は高校生にとって同年代のピア(年齢・地位・能力・経験などが同等の者・同僚同輩・仲間)によるサポート(支援)であることが考えられる。本大学生の学習支援ボランティア活動を、西山・山本(2002)

によるピアサポート機能によって分類すると、①相談活動（悩みを吐露され聴くカウンセリング的関わり）、②葛藤調停（心の葛藤を和らげたり、問題に対する納得できる受け止めの支援）、③仲間づくり（友達のようなさりげない支援）、④（専門家の）アシスタント（在籍校から出された課題を遂行する手伝い）、⑤学習支援（得意な教科に関しては教育的な支援）、⑥（仲間としての）指導・助言（先輩（メンター）としてのアドバイス）、⑦リーダー（高校生学習支援実践の場での主導役）があると考えられる。特に⑥のメンターとしての役割は高校生より数年年上の大学生の役割として重要と思われる。メンターの定義については様々であるが（Haggard, et.al, 2011）、おおざっぱに表現するとメンターとは職場や学校などにおいて若いあるいは経験が少ない者に対して支援したりアドバイスを行う人であり、数年年上の先輩であることが多い。そのメンターの役割を久村（1997）は「指導者、理解者、相談者、教育者、支援者や後見人という何役もの役割を演じ、またその役割を果たす人」と述べており、前述のピアサポートの役割も包括している。そのため、本稿の大学生は高校生のメンターであったとも考えられる。

しかし、大学生は学習支援における指導力不足や、支援中に雑談することを危惧していた。つまり、メンターの役割を果たせないことを苦慮していたと思われる。しかし、特別支援学校の教員は大学生に指導力は求めておらず、雑談になることを大いに歓迎していた。つまり、ピアによるサポートを基本に、出来る範囲でメンターの役割を行うことがボランティアの大学生に求められていた学習支援スタイルといえる。

また、学習支援ボランティアを行う前には十分な事前指導が必要であることも明らかになった。本研究の大学生はボランティア活動の前に様々な準備を行い、詳細なオリエンテーションを受けている。しかし、直前にも実際の現場や高校生の状況に応じた具体的なオリエンテーションを受けることにより、大学生の緊張と不安も取り除くことが出来、より良いボランティア活動が有効に行われると思われた。

研究の限界

本研究は入院中の高校生への学習支援ボランティアを行った大学生と、学習支援全体をコーディネートしていた教員のみ視点から分析を行った。活動内容を評価するには、支援を受けた高校生やその保護者からの視点を合わせる必要があるとあり、この視点を明らかにする研究が今後求められる。

5. 結論

入院中の高校生に対し、病院併設の特別支援学校の教員の管理のもと、教育学部所属の大学生が学習支援ボランティアを行った。大学生は同年代として寄り添いながら一緒に考え、学ぶ楽しさを実感できるような学習支援を行っていた。その結果、高校生は困難な状況の中、生きる意味、学ぶ意義を感じる事が出来ていた。このような効果が得られた理由に、高校生にとって大学生は同年代としてのピアとしての役割と先輩としてのメンター的役割を実践したことによると思われた。また、このような活動を大学生が有効に行うためには、病院内での活動に即した十分なオリエンテーションを行い、大学生の不安を取り除くことも重要と思われた。

謝辞

本研究の一部は2016年度日本対がん協会リレーフォーライフプロジェクト未来の研究助成を受けて行われた。また、本論文はこの研究助成報告書の内容を質的に再分析したものである。本調査にご協力いただきました特別支援学校の先生方、大学生、また、調査結果の分析や妥当性の検討にご協力いただきました先生方に心より感謝申し上げます。

引用文献

- 木下康仁 (2003). グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い. 弘文堂.
- 関由起子 (2018). 入院中の子どもたちの学校教育の現状と課題. 日本小児血液・がん学会雑誌 55, 148-152.
- 滝川国芳 (2016). 厚生労働省指定小児がん拠点病院に設置されている学校種と教育課程の実際—特別支援学校 (病弱). に焦点をあてて—. 東洋大学文学部紀要 教育学科編 42, 51-58.
- 新平鎮博, 森山貴史, 深草瑞世 (2017). 小児がんのある高校生等の教育に関する調査報告. 国立特別支援教育総合研究所ジャーナル 6, 6-11.
- 西山久子・山本力 (2002). 実践的ピアサポートおよび仲間支援活動の背景と動向—ピアサポート/仲間支援活動の起源から現在まで. 岡山大学教育実践総合センター紀要 2, 81-93.
- Haggard DL, Dougherty TW, Turban DB and Wilbanks JE (2011). Who is a mentor? A review of evolving definitions and implications for research. Journal of Management 37, 280-304.
- 橋本尚英・丹藤昌治 (2017). 日本のがん対策. 公衆衛生81, 261-264.
- 久村恵子 (1997). メンタリングの概念と効果に関する考察. —文献レビューを通じて—. 経営行動科学 11, 81-100.
- 森山貴史, 日下奈緒美, 新平鎮博 (2016). 小児がん拠点病院における小児がんの児童生徒の教育に関する調査報告—教育環境の実態を中心に—. 国立特別支援教育総合研究所ジャーナル 5, 25-30.
- 文部科学省 (2009a). 子どもの徳育の充実に向けた在り方について (報告). 3. 子どもの発達段階ごとの特徴と重視すべき課題. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/053/gaiyou/attach/1286128.htm (アクセス日: 2019年3月12日)
- 文部科学省 (2009b). 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編 (幼稚部・小学部・中学部・高等部). http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/18/1278525.pdf (アクセス日: 2019年3月12日)
- 文部科学省 (2012). 長期入院児童生徒に対する教育支援に関する実態調査の概要. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/_icsFiles/afieldfile/2015/05/26/1358251_02_1.pdf (アクセス日: 2019年3月12日)
- 涌井剛・関由起子 (2017). 長期入院中の高校生への学習支援の試み—特別支援学校のセンター的機能を活かして—. 埼玉大学教育学部附属 教育実践総合センター紀要 16, 139-142.

(2019年3月18日提出)

(2019年4月19日受理)

Schoolwork during hospitalization for high school students:

Effects of Learning support from university student volunteers

MASHITO, Minami

Graduate school of Education, Saitama University

SEKI, Yukiko

Faculty of Education, Saitama University

Abstract

Hospitalized high school students are unable to continue their schoolwork if their hospital does not have a high school educational system. Saitama Children's Medical Center with a special needs education school has begun using university student volunteers to provide learning support to hospitalized high school students. This study aims to describe the learning methods used by university student volunteers and the effects of those methods on hospitalized high school students. Six university students and three special needs education school teachers were interviewed, while 23 university students were surveyed using an online survey tool. All participants were asked about the university student volunteers' behaviors as well as the effects of those behaviors. Kinoshita's Modified Grounded Theory Approach was applied to perform a qualitative analysis of the data from the interviews and online survey. Results showed that the university student volunteers were able to connect with the high school students by treating them like peers. This put the high-school students with serious illnesses at ease. We concluded that the learning support from university student volunteers was useful for the hospitalized high school students; it helped them improve their academic abilities as well as their mental stability, which gave them courage to face their condition.

Keywords: learning support, university student volunteers, education for students with serious illness, hospitalized high school students